

# 短期大学生の退学の実態

加藤由美子・原田まつ子・谷井涼子・黒田圭一

## The Investigation into the Actual Condition of Students in a Junior College

Yumiko KATO, Matsuko HARADA, Ryoko TANII, Keiichi KURODA

### Abstract

We analyzed students in a creation junior college in Tokyo and people who left the junior college. They were majoring in subject of dietitian.

Results are as given below.

- 1) A correlation is found between results of exams of 3 subjects they took. (The exams were held in April, May and Jun.) Moreover, people left the junior college scored significantly in 2 subjects of the subjects.
- 2) In the first semestral assessments (13 subjects), the students' assessments correlated among 13 subjects. On the other hand, left people's assessments were uncorrelated among there subjects.
- 3) Reasons for leaving the junior college of left people are, in order of quantity, the gap between a image of dietitian before matriculation and reality of it they understood after entering in junior college, the loss of the will to study and the reluctant matriculation, the poor academic performance and falling behind in their studies, and the worry about health and poor physical condition.

### 要旨

都内某短期大学（食物栄養専攻）に入学した学生について、その後の学生の状況を 2 者（退学者・在学者）に分けて分析し、以下の結果が得られた。

1) 4 月および 5 月・6 月に実施した 3 科目の試験結果は、両者とも 3 科目間すべてに相関が見られた。(在学者：数学基礎講座と科目Ⅰ  $r=.425 p<.01$ , 数学基礎講座と科目Ⅱ  $r=.431 p<.01$ , 科目Ⅰと科目Ⅱ  $r=.615 p<.01$ 、退学者群：数学基礎講座と科目Ⅰ  $r=.603 p<.01$ , 数学基礎講座と科目Ⅱ  $r=.614 p<.01$ , 科目Ⅰと科目Ⅱ  $r=.465 p<.05$ )。

また、科目ⅠおよびⅡの退学者の得点は、在学者に比べ、有意に低かった(科目Ⅰ  $p<.000$ , 科目Ⅱ  $p<.001$ )。

2) 前期成績評価(13 科目)については、在学者は、科目間全てに相関が見られたが、退学者は、そうではなかった。

3) 退学者の退学理由は、栄養士資格取得に対する入学前と後の認知の違い、学業継続意欲の喪失・不本意入学、学業不振・授業についていけない、体調不良の順であった。

### 緒言

平成 21 年版青少年白書<sup>1)</sup>によれば、大学・短大への進学率は、平成 20 年度には 55.3%となった。

現在、日本の大学数は 773 校、短大 407 校、高等専門学校(高専)は 64 校、専修学校の専門課程(専門学校)は、3348 校である<sup>2)</sup>が、現在、高校までの発達課題が未成熟性を示す多様な生徒が、そのまま学生として短大・大学へ移行してきたといわれるようになって<sup>3)</sup>。

内閣府では、このような高等教育機関で、適応に困難を抱え、複合化する問題を持つ中途退学者・不登校者や自立が困難な青少年の状況を把握するために「青少年総合推進法案」(平成 21 年 3 月国会提出)において、支援を推進することとしている。

しかし、その実数については、高等学校までの退学者数と異なり、高等教育機関に入学後に退学した学生の

調査はされていなく、読売新聞が、教育の取り組みについての調査<sup>4) 5)</sup>を実施後、各大学の退学率の公表がされてきた<sup>6) 7)</sup>のが実情である。

一方、教育機関卒業後の進路は、「学校(新卒)→正規就職」という道が一般的である。

しかし、高等教育機関からの退学後の状況は、その後の約 60%が非正規雇用、約 15%は失業・無職との調査もある<sup>8)</sup>。さらに、最終学歴が「高等教育機関中退」である人の「キャリア(経歴)」は、そのうちの約 50%が、「一貫して非正規雇用」であり、退学後のキャリアにも「中退」という事実が影響している<sup>9)</sup>。

このような実態を考慮すると、入学後、途中で退学することは、ひとつの大きな社会的問題としてとらえる必要があるといえる。

短期大学は、入学者に対して、社会で活用できる資格と実力を修得させて、世の中に送り出す義務がある。しかし、数多くの多様な学生を、落ちこぼしなく、ひとつの目的に向かって束ねていくためには、各学校に対応した独自の工夫が必要である。

某短期大学食物栄養専攻学生の昨年度(平成 21 年度生)入学生に対する退学者の数が多かったため、その実態を明らかにし、今後の対策の手がかりにすることから、後ろ向き調査・分析を行った結果を報告する。

## 方法

### 1 調査対象

21 年 4 月都内某短期大学食物栄養専攻に入学した学生 98 名(男子 13 名、女子 86 名)を対象とした。

### 2 調査・解析時期

平成 21 年 4 月～平成 22 年 11 月

### 3 調査方法

1) 各学生の 4 月と 5 月・6 月に実施した試験科目に

ついて、退学者と在学者の比較を行った。

2) 前期末科目については、成績評価を退学者と在学者とで比較した。(点数は、いずれの時期、科目も 100 点満点とした)

3) 退学者の退学時期およびその理由については、退学者時系列票による読み取りを行った。

### 4 分析方法

統計ソフト SPSS Ver.11 を用い、各科目間の評価の相関は、Pearson 積率相関係数の検定、退学者・在学者の平均の差については、Mann-Whitney の U 検定を用いた。

## 5 調査内容

### 結果および考察

対象者の概要は、表 1 に示すとおりである。

#### 結果 1)

退学者と在学者の点数を科目ごとに比較すると、数学基礎講座は 5.45 点、科目 I は 32.36 点、科目 II は 21.09 点の差があり、3 科目とも、退学者の点数は在学者に比べて低かった。

また、科目 I ( $p<.000$ ) と科目 II ( $p<.001$ ) の退学者の点数は、在学者に比べ有意に低かった(表 2)。

3 科目間の平均点の相関関係を見ると、在学者は、数学基礎講座と科目 I ( $r=.425$ ,  $p<.001$ )、数学基礎講座と科目 II ( $r=.431$ ,  $p<.001$ )、科目 I と科目 II ( $r=.615$ ,  $p<.001$ ) 間に相関が見られた(表 3)。また、退学者は、数学基礎講座と科目 I ( $r=.603$ ,  $p<.001$ )、数学基礎講座と科目 II ( $r=.614$ ,  $p<.001$ )、科目 I と科目 II ( $r=.465$ ,  $p<.05$ ) 間に相関があり、両者とも 3 科目すべてに相関が見られた(表 4)。

表 1 調査対象者の概要

時 期	平成 21 年 4 月	平成 22 年 3 月
人 数 (名)	98	75
年 齢 (歳)	18.39±1.67	18.62±2.73

※50 歳台の学生は除く

表2 3科目の平均点の比較 (退学者・在学者)

科目名	区分	人数	平均点±S.D	p値	有意確率
数学基礎講座	全学生	n=98	56.66±23.45	.232	n. s
	在学者	n=75	58.05±22.57		
	退学者	n=23	52.60±25.92		
科目Ⅰ※	全学生	n=90	52.86±26.22	.000	***
	在学者	n=69	60.41±21.82		
	退学者	n=21	28.05±24.47		
科目Ⅱ※	全学生	n=93	43.19±27.35	.002	**
	在学者	n=71	48.18±27.90		
	退学者	n=20	27.09±18.08		

※科目により退学・欠席者人数の違いあり \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

表3 3科目の平均点の相関関係 (在学者)

	数学基礎講座	科目Ⅰ	科目Ⅱ
数学基礎講座	有意確率		
	n	75	
科目Ⅰ	有意確率	***	
	n	69	69
科目Ⅱ	有意確率	***	***
	n	71	68

\*\*\*  $p < .001$

表4 3科目の平均点の相関関係 (退学者)

	数学基礎講座	科目Ⅰ	科目Ⅱ
数学基礎講座	有意確率		
	n	23	
科目Ⅰ	有意確率	**	
	n	20	21
科目Ⅱ	有意確率	**	*
	n	21	19

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

考察1)

数学基礎講座の初回試験の対象者は全学生であり、この試験は、オリエンテーション時に実施した。しかし、この結果、成績下位者(下位60名)に対してのみ、その後の講座受講を実施(全15回)した。

新入生のオリエンテーションは、4月3日から始まり、この日は4日目である。短大の状況もわからず、緊張感のある1日であるが、今後の学生生活に対して希望に満ちている時期であり、高校までに身につけた学力を最大限に出して受けたものと考え、在学者と退学者の点数に大きな違いは見られなかったと思われた。

しかし、科目Ⅰと科目Ⅱの2科目の退学者と在学者間の点数には大きな差があった。オリエンテーションの後の授業は4月中旬から開始さ

れているが、科目Ⅰの試験実施日は5月下旬(6回目授業中)、科目Ⅱの試験実施日は6月初旬(7回目授業中)に当たっていた。この2科目の試験実施時期は、授業回数(15回)の半ばが過ぎており、栄養士資格取得に対する各専門科目について、具体的な内容や進捗状況も把握できた頃であると思われる。

しかしながら、この時期は、前期授業終了後に実施される定期試験(7月末)までには日数があるといえる。そのため、この時期は、高校時代に比べて広範囲な行動が可能な短大生活をエンジョイできる時間として、学習時間よりも優先した時期であるとも考えられる。

このような授業開始後の学習に対する学生の考え方は、入学当初に不安を持っていた場合、学習内容が理解できれば安心と感じるが、学習不足を感じた場合は、

それに対する方策を検討する必要性を感じると思われる。

逆に、この専攻に対する学習内容に対する入学前と後の違いが大きい場合や目的意識を持たずに何となく入学した者は、やる気が失せ、学習に対する興味が低下してしまう。このような認知不協和音<sup>10)</sup>の関係が現れた場合には、自分の意見や行動を変えるなど、新しい認知要素を加えて意識的に理解させる方法で修正するといわれる。

しかし、科目Ⅰと科目Ⅱの退学者の点数が、在学者に比べ有意に低いのは、前期半ばに実施した2科目の試験に対して、認知不協和音の状態が発生したが、自らの行動を修正できず、オリエンテーション時とは異なった学習への取り組み方をした者が、出現し始めたのではないかと思われた。

結果2)

前期成績の各科目の平均点を表5に示した。

退学者の各科目の点数は、在学者に比べるとすべての科目について低く、13科目全科目の点数には19.33点の差があった。また、退学者の科目のうち、合格点の60点を超えた科目は2科目であったが、在学者は、1科目を除き、すべての科目が60点以上であった。また、全科目の点数を両者で比較すると、退学者は、科目b・i・j・I・k ( $p<.000$ )、科目d・e・f・h・II ( $p<.01$ )、科目a・g ( $p<.05$ )の点数において、在学者に比べて有意に低かった。

各科目間の相関関係では、在学者は、すべての科目間に相関が見られた(表6)。しかし、退学者は、科目bとの相関がある科目はなく、科目c・IIとは1科目、科目dとは2科目、科目e・fとは3科目、科目jとは4科目、科目a・i・kとは5科目、科目h・Iとは6科目、科目gとは7科目の相関がみられ、ひとつの科目に対し、13科目すべてに相関が見られた科目はなかった(表7)。

表5 前期13科目成績の平均点の比較(退学者・在学者)

科目名	受講数	区分	平均点±S.D	p値	有意確率		
科目a	n=79	※	全学生	58.98±26.26	.030	*	
			在学者	60.88±25.92			
			退学者	42.60±24.09			
科目b	n=70	※	全学生	59.81±22.18	.000	***	
			在学者	64.12±21.31			
			退学者	38.64±16.45			
科目c	n=89	※	全学生	75.58±18.84	.073	n. s	
			在学者	77.30±18.18			
			退学者	66.33±20.70			
科目d	n=84	※	全学生	66.45±20.78	.004	**	
			在学者	68.25±21.08			
			退学者	50.17±21.84			
科目e	n=86	※	全学生	62.91±24.00	.003	**	
			在学者	65.81±23.06			
			退学者	44.62±23.67			
科目f	n=86	※	全学生	66.12±18.99	.002	**	
			在学者	67.50±19.69			
			退学者	53.92±20.42			
科目g	n=87	※	全学生	59.58±20.38	.015	*	
			在学者	61.95±20.11			
			退学者	42.75±16.05			
科目h	n=88	※	全学生	46.31±20.06	.001	**	
			在学者	48.08±20.69			
			退学者	34.23±11.19			
※※	科目Ⅱ	n=90	※	全学生	60.47±21.21	.001	**
在学者				63.92±20.88			
退学者				43.33±16.39			

科目 i	n=87	※	全学生	72.56±11.38	.000	***
			在学生	74.01±11.11		
			退学生	62.17±8.12		
科目 j	n=86	※	全学生	71.28±22.53	.000	***
			在学生	74.49±21.60		
			退学生	48.23±21.07		
科目 I	n=89	※	全学生	59.16±21.81	.000	***
			在学生	64.54±19.00		
			退学生	30.87±11.68		
科目 k	n=88	※	全学生	74.22±17.51	.000	***
			在学生	76.64±16.64		
			退学生	58.38±16.17		
平均			全学生	65.31±19.53		
			在学生	66.73±19.94		
			退学生	47.40±17.53		

※ 退学・欠席者人数の違いにより科目ごとの受験者数の違いあり

表6 前期成績評価の平均点の相関関係 (在学者)

※: 表1・2で、科目IおよびIIと記載された科目, ※※: 選択科目

	科目a	科目b	科目c	科目d	科目e	科目f	科目g	科目h	科目II	科目i	科目j	科目I	科目k
科目a※※ 有意確率													
n	57												
科目b 有意確率	***												
n	72	59											
科目c 有意確率	***	***											
n	70	59	72										
科目d 有意確率	***	***	***										
n	72	57	74	72									
科目e 有意確率	***	***	***	***									
n	72	59	74	72	74								
科目f 有意確率	***	***	**	***	***								
n	72	59	74	72	74	74							
科目g 有意確率	***	***	***	***	***	***							
n	72	59	74	72	74	74	74						
科目h 有意確率	***	***	***	***	***	***	***						
n	72	59	74	72	74	74	74	74					
科目II※ 有意確率	***	***	***	***	***	***	***	***					
n	72	59	74	72	74	74	74	74	74				
科目i 有意確率	***	***	***	***	***	***	***	***	***				
n	72	59	74	72	74	74	74	74	74	74			
科目j 有意確率	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***			
n	72	59	74	72	74	74	74	74	74	74	74		
科目I※ 有意確率	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***		
n	72	59	74	72	74	74	74	74	74	74	74	74	
科目k 有意確率	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	
n	72	59	74	72	74	74	74	74	74	74	74	74	74

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

表7 前期成績評価の平均点の相関関係 (退学者)

※:表1・2で、科目IおよびIIと記載された科目, ※※:選択科目

		科目a	科目b	科目c	科目d	科目e	科目f	科目g	科目h	科目II	科目i	科目j	科目I	科目k	
科目a※※	有意確率														
	n	10													
科目b	有意確率														
	n	7	11												
科目c	有意確率														
	n	7	10	12											
科目d	有意確率														
	n	8	10	10	12										
科目e	有意確率	*													
	n	9	9	10	10	13									
科目f	有意確率				**										
	n	9	10	10	11	11	13								
科目g	有意確率	***				**									
	n	9	9	10	10	11	11	12							
科目h	有意確率				*		*	*							
	n	9	10	11	11	12	12	12	13						
科目II※	有意確率														
	n	10	11	11	12	12	13	12	13	15					
科目i	有意確率	*						*	**						
	n	10	9	9	10	10	11	11	11	12	12				
科目j	有意確率	*				*	**	**							
	n	9	9	11	10	11	11	11	12	12	10	13			
科目I※	有意確率	*		*				*	*		*				
	n	10	11	12	12	12	13	12	13	14	12	13	15		
科目k	有意確率							**	**	**	*		*		
	n	9	9	10	10	11	11	10	11	12	10	11	13	13	

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

考察 2)

数学基礎講座初回(オリエンテーション時)、科目Ⅰ(5月下旬)、科目Ⅱ(6月初旬)で実施した3科目の平均点が、在学者 55.55±24.10 点、退学者 35.91±22.82 点に対し、前期 13 科目の平均点では 66.73±19.94 点、退学者 47.40±17.53 点と両者とも点数が高くなった。

前期の各科目の成績評価基準は、学期途中に何度か実施される試験や、課題提出達成状況、平常点等の配分が若干異なる。しかし、授業終了日(7月下旬)に実施される試験は、最終評価に大きく位置する。そのため、在学者は、前期の成績評価としての意識が強く、先に実施した2科目の試験実施日より、学習に対する取り組み方がより高くなったと思われた。

同様の理由で、退学者も点数の上昇が見られ、前期科目の成績評価としての意識はあったと思われた。しかし、在学者に比べると、11科目の評価が有意に低く、60点を超えた科目は2科目しかなかったことから、その取り組み方に問題があったのではないかと思われた。

また、在学者の科目間の相関関係は、すべてに見られ、各科目に対する学習状況が同等と思われることから、成績上位者は、どの科目も学習に意欲的に取り組むことで上位の成績を得、下位者は、どの科目も積極的に学習に取り組むことができずに下位の成績を得た傾向が現れていると思われた。

しかし、退学者は、各科目に対応する相関する科目の数に違いがあり、意欲的に学習した科目もあれば、そうでない科目もあり、各科目の試験に対する取り組み方に規則性がないように思われた。

栄養士課程は、「栄養士として働く」という将来の資格取得・職業選択の目標が明確である。現在、就職状況の低迷化の中、学生にとっても、保護者や高校教員においても資格取得は大きな魅力である。しかし、目

標が明確なため、カリキュラムは必須科目中心であり、選択の自由度が低くなりがちである<sup>3)</sup>。

つまり、栄養士の職業内容を明確に理解してこないまま、資格取得しようと入学してきた場合、学力が十分あったとしても、自分との適性に疑問を持ち、その違いから学習を継続することが困難を要すると思われる。また、栄養士の資格取得以前に、短大に入学することの目標設定の意識が脆弱だったり、基礎的学習方法が身につけていない場合は、さらに学習が進むにつれて、その継続に対する自信を失ったり、不安感を募らせる。加えて、マイナス思考に陥った際、そのイヤな気持ちを噛み砕いた後、認知を再構成するには、スキルや時間が必要である。

今回、これらの試験実施日は、7月末に集中していた。

退学者は、前述した2つの理由により、栄養士課程に在籍し続けることに苦痛があり、退学を考えていた。そのため、退学についてのマイナス思考を再構成することができないと同時に、学習することの意味への疑問も持ちながら、満遍ない試験対策への取り組みができず、各科目の点数による相関にバラツキがあったと思われた。

結果 3)

退学時系列票内容による退学者の退学理由を表8に示した。

その理由で上位は、入学前と後の認知の違い、学習不振、就学意欲の低下、体調不良の順であった。退学時期では、前期(4月~7月)に5名、夏休み中(8月~9月中旬)に5名、後期(10月~3月)に13名であった。

また、出席簿の欠席状況で、欠席が3回目に当たった月をみると、前期に13名、夏休みに1名、後期に1名で、欠席が2回未満の者は8名であった(表9)。

表 8 退学者時系列票による退学者の退学理由

退 学 理 由	人 数	退 学 理 由	人 数
資格に対する入学前と後の認知の違い	12	友人関係	2
学業の継続意欲の喪失・不本意入学	11	身体的疾患	1
学業不振・授業についていけない	11	経済的	1
体調の不良	8	就職のため	1
他の教育機関への入学・転学	4	家族関係	0
精神的・心因的不適応	3		



表9 退学者時系列票と出席簿による退学者の状況

平成 21 年 4 月～ 平成 22 年 3 月の間	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	欠席 なし
退学者時系列票による退学時期	2	1	0	2	0	5	4	0	1	1	3	4	0
欠席が 3 回目になった時期※	2	2	7	2	1	0	0	0	0	0	1	0	8

考察 3)

退学者時系列票の記載内容では、退学の決定が、本人の強い意志で決めた場合、悩みながら保護者と相談した場合、保護者と相談するも反対されて長期間 1 人で悩んでいる場合、悩みを抱えて担任に相談に来る場合等であった。

その退学時期の決定については、学費支払いとの関連があると思われる。

短大の学費の支払いは、1 年または、半期ごとである。前期授業料は、ほとんどが入学時に支払い済みであり、支払い後の月単位の返金はできない。そのため、退学決定に対して、急いで答えを出さなくとも、学期末に最終的な決定を出せばよいという、時間的余裕がある。このことから、最終結論としての書類上の退学日は、夏休み中から後期授業料支払い前の 10 月の時期が 9 名と多かったと思われる。

一方、出席簿の状況から見ると、半数以上が前期に集中しており、特に 3 回目の欠席が 6 月に見られた者が多く、退学者時系列票の記載とはズレが生じていた。3 科目の試験に対する結果・考察で述べたように、栄養士取得に対する入学前とその後の認知が異なるであろう 6 月ごろから欠席が多くなり始める。その後、前期末で退学の結論を出し始め、後期に突入する前の夏休み前後の退学届提出に繋がることが多いと思われる。

高等教育期間の中退理由で、「関心の移行」、「学習の意欲喪失」、「学業不振」、「人間関係」、「不本意入学」の順に比率が多い報告<sup>8)</sup>もある。

今回は、「人間関係」による理由は少なかった。しかし、他の理由は一致しており、授業の進行により学習内容の把握ができ、入学前とこの頃の自分の考えが「不本意入学」を認知させ、学力不足により興味が薄れ「学業不振」が見られ、「学習意欲が低下」し、「体調低下」が現れたという一連の流れと考えた。身体的訴えをする学生が、その後の退学に繋がる可能性の高いことは、指摘されている<sup>11)</sup>が、精神的症状・心因的不適応や

身体疾患の自覚を感じるまでには至らなかったと思われる。

このように、退学の理由は、複数の事柄が絡んでいることが、退学者時系列票から読み取れた。そのため、「入学前と後の認知の違い」、「学習不振」、「就学意欲の低下」、「体調不良」に偏ってはいるものの、何が原因であるのかを 1 つに特定するには困難であった。

このことから、某短期大学の場合は、この 4 項目に特化した、さらなる詳細な分類をすることが必要と思われる。具体的な内容が明確になれば、この短期大学独自の状況が把握でき、その結果に基づいた退学者対策が導き出せると考えられる。

また、退学者のうち、4 月に退学届を出した学生が 2 名いた。

1 名は、出席は、オリエンテーションだけで、授業に全く出席していなく、他の 1 名は、入学時の面接の際に不本意と感じたという学生であった。

前者は、短期大学に毎日通学することや、朝から夕方まで一日授業に参加することに戸惑いがあった。また、後者のように、周囲が指示をし、やらされ感で進路を選択すると、自主的に決めたように見えても、本人の主体的な内実が伴っていない<sup>12)</sup>、自分の居場所に違和感を感じてしまう。しかし、この学生は、保護者や高等学校の教員の期待に対しての罪悪感から、そのまま前に進まざるを得なかったようであった。そのため、通学はしていたものの、次の展望も決められないまま、退学することに繋がってしまった。

不況の現在、日本の高等教育（大学・短期大学）費用の家計負担は、OECD 加盟国の中で 51%と、韓国の 53%に次いで高く<sup>13)</sup>、保護者の立場からも極力抑えたいのが心情である。

短期大学の学費は、4 年制に比べてかからず、食物栄養専攻は、卒業と同時に短期大学士と栄養士の資格の取得ができる。しかし、このダブル資格取得に対するカリキュラム内容を修得することは、短期間ゆえに

学習に対する取り組みに覚悟が必要である。

このようなことから、入学前のオープンキャンパスへの参加や通常見学の際、受験生や高等学校側に対して、資格をどのように活用するかという、卒業後の進路も見据えた栄養士の資格取得の理解について、さらに深める必要があると思われる。

また、退学についての最終的な決断は、本人や保護者に因る。「やめたい」と思う気持ちの克服には、友人の支援が大きく影響するとの報告<sup>14)</sup>もある。しかし、欠席が重なり始める6月ごろは、入学後まだ親しい友

人ができていない場合も多い。そのため、前期授業開始後、2回以上の欠席が続いた場合は、教員間での連絡と担当教員の早期面談の対応が必要と思われた。

希望に満ちて入学した短大生が、どこに不満や違和感があるのかを明らかにすることは、かなり抵抗のある課題である。しかし、種々の問題が起こるたびに対応するのではなく、この問題に向き合うことが、退学者を減少させ、在学者にとっても満足のある学生生活を送ることができる手がかりを得ると思われる。

## 参考・引用文献

- 1) 平成 21 年度版 青少年白書：文部科学省
- 2) 平成 21 年度 学校基本調査：文科省
- 3) 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討,名古屋文理大学紀要,第 6 号, 2006
- 4) 読売新聞記事：大学の實力 教育向上の取り組み調査 上下, 2009. 7.8.
- 5) 読売新聞教育取材班：教育ルネッサンス 大学の實力,中央公論社, 2009
- 6) 2011 年版大学ランキング,週刊朝日進学 MOOK,朝日新聞出版,2010
- 7) 週刊ダイヤモンド：ダイヤモンド社,第 98 卷 38 号 2010,9
- 8) 中退白書 2010—高等教育期間からの中退—：ピースマインド総合研究所,NEWVERY,2010.6
- 9) 小杉礼子・堀有喜衣・上西充子・中島史明・耳塚寛明・本田由紀・大都市の若者の就業行動と意識—広がるフリーター経験と共感,日本労働研究機構,2001,10
- 10) 認知不協和音:國分康孝編,カウンセリング辞典,誠信書房,2009
- 11) 小塩真司・願康寺礼子・桐山雅子：大学退学者の入学時における悩みの特徴,日本教育心理学会総会発表論文集, Vol. 49, 293, 2007
- 12) 無藤 隆：自主性を育てることの難しさ,児童心理,金子書房,(No921),2010,10
- 13) 馬込武志・尾崎剛志：学生の退学要因と退学回避の方策について,湊川短期大学紀要,44 集 pp.69—74,2008
- 14) 各国の高等教育費の負担割合:OECD Education at a Glance, 2009